様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６８３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７００６９

研究課題名（和文）カンボジアのチャム人ムスリムのクルアーン理解－翻訳と解釈の展開－

研究課題名（英文）How Cham Muslims in Cambodia Understand the Qur'an: Their Translation and Interpretation

研究代表者
大川　玲子（OKAWA, Reiko）

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：５０４３４１８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、カンボジアの少数民族であるチャム人ムスリム（イスラーム教徒）が、2011年に初めて聖典クルアーンをクメール語（カンボジア語）とチャム語に翻訳したことに着目し、クルアーン訳が成立した経緯やその理解（解釈）に焦点をあて、調査研究を行った。
　その成果として、クルアーン翻訳事業が二つの異なる集団によってなされたこと、カンボジア以外のムスリム国の援助を受けていること、人々による理解はクルアーンの呪術的使用や学校教育の場と通して行われていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：　This study, inspired by the fact that the Cham, Muslim Minority in Cambodia, translated the Qur’an into Khmer (Cambodian language) and Cham language, focuses on the circumstances of the Qur’an translation and their understanding of the Qur’an. As the result of the research, it became clear that two groups conducted the translation of the Qur’an separately, that they receive support from Muslim countries outside Cambodia, and that Cham understand the Qur’an through magic and school education.

研究分野：イスラーム学

キーワード：イスラーム　クルアーン　コーラン　カンボジア　ムスリム　チャム

## １．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、イスラーム教徒の聖典クルアーン（コーラン）の解釈史に焦点をあてて研究を行ってきた。昨今は特に、非アラブ圏のマイノリティ・ムスリムの現代的解釈を研究してきた。そのようななか、カンボジアでチャム人ムスリムの調査をする機会を得て、プノンペンにあるカンボジア文書センターDC-Cam(Documentation Center of Cambodia、現在 The Sleuk Rith Institute に組織移行中)の協力をもとに、イスラーム文献についての調査を開始していた。

その調査の過程で、2011 年にクルアーンがカンボジア語（クメール語）とチャム語に翻訳されていることが確認された。そこで本研究を立ち上げ、チャム人がクルアーンとどのように接し、それをどう理解しているのか、またそのクルアーン翻訳はどのような事情でなされたのかについての現地研究を行い、マイノリティ・ムスリム共同体の特質の一側面を明らかにしたいと考えた。

## ２．研究の目的

この研究の目的は、カンボジアのムスリムである少数民族チャム人の共同体内におけるクルアーン理解の展開を明らかにすることである。そのために、クルアーン翻訳の背景と、日常生活のなかでのクルアーン使用やクルアーンの章句の理解（解釈）について調査することとした。

チャム人はポル・ポト（クメール・ルージュ）時代の大虐殺を乗り越え、現在、復興の途上にある。この共同体において、2011 年にチャム語とカンボジア語（クメール語）への二種類のクルアーン翻訳書が初めて刊行され、この後、彼らのクルアーン理解が大きく変わっていくと考えられた。そのため、チャム人共同体のクルアーンとの関わりをみることで、ムスリムにとっての聖典の一つの様相を明らかにすることを目指した。

## ３．研究の方法

本研究は 3 年間にわたって実施した。ただ当初の予定と異なり、研究代表者が平成 26 年度に 4 か月間、産休・育休を取得したこともあり、フィールドワークと文献精査の時期を調整することになった。

平成 26 年度と平成 27 年度は主にカンボジアのチャム人ムスリムに関する文献や資料を再度、精読かつ批判的講読を行った。またこれらの文献資料を土台として、すでに取得していた現地調査データを整理し検討した。加えて、刊行物のための執筆準備を開始した。

平成 27 年度にはベトナムを訪れ、チャム人がチャムパ王国を築いた際に栄えた地域(ダナン、フエ、ホイアン、ミーソン)を視察した。ダナン・チャム彫刻美術館やミーソン遺跡、ホイアンの歴史資料館などを訪問し、チャム人がムスリムに改宗する以前の信仰状況を理解することができた。

平成 28 年度には、カンボジアのプノンペンを訪れ、フィールド調査を行った。この時、クルアーン翻訳委員会のメンバーやクルアーン教師たち、イスラーム宗務最高評議会（後述）のメンバーへのインタビューを行った。そしてこれまでの文献資料や調査データを合わせて、全体像を描くことを検討し、論考の執筆活動を継続した。

## ４．研究成果

(1) 研究の主な成果

クルアーン翻訳に関しては、二つの集団が別々にその活動を進めてきたことが明らかになった。一つの集団は、チャム人共同体のリーダーの１人であるアフマド・ヤフヤーが立ち上げた、クメール語とチャム語のクルアーン翻訳委員会である。この翻訳の刊行はクウェートからの財政支援を受けて可能となった。クメール語委員会にはアラブからの留学経験のある若いメンバーが多かったが、チ

ャム語委員会には地方の宗教学者が多くを占めた。もう一つの翻訳は、チャム人共同体を統括し、政府からも認可されているイスラーム宗務最高評議会によって刊行された。実際には学者であり政治家でもあるザカリーヤ・アダムが翻訳を行い、アプリとしても用いられている。このプロジェクトにはマレーシアからの援助があったようである。

以上の状況は、チャム人共同体が向いている方向が一つではないことを示していると考えられる。つまり前者は、ポル・ポト期以後のカンボジア復興期のなかで、チャム人に援助を始めた中東のアラブ国クウェートからの援助を積極的に受け、それを元に、チャムパ王国の末裔であるチャム人とカンボジアに居住するカンボジア人という二つのアイデンティティを両立させつつ、二つの言語によるクルアーン翻訳を刊行した。他方、後者は、歴史的に関係の近かったマレーシアからの援助を受ける組織であり、そのなかからカンボジア語のみでクルアーン翻訳書を刊行したのである。

クルアーン理解に関しては、クルアーンを用いる呪術師とクルアーン教師から聞き取りをしたことで、庶民の考えと知的職業にある者の考えを知ることができた。前者はクルアーンを断片的に理解し、現世利益のために役立つと考えられている句を読誦したり、護符に書きつけて用いたりしている。また厳格なムスリムは呪術を反イスラーム的行為として批判するが、チャム人呪術師たちは、クルアーンを用いているからこそ、自分たちの行為はイスラームに反していないと、クルアーン使用を呪術を正当化する根拠にしている。

後者の教師たちには、私塾で教えるものや政府に認められた学校で教えるものがいた。私塾の教師は幼い頃にクルアーンを学び、ポル・ポト時代の迫害によってクルアーン教師がいなくなったこともあり、自分の生活のために近所の子どもたちに教えてきた。アラビア語を学んだことはなく、授業用のテキストはマレーシア経由の古いものであった。政府公認の学校の教師は、標準的なクルアーン学であるタジュウィード（読誦学）に加えて、預言者伝やアラビア語といった正規のイスラーム学を学んでおり、カンボジアの新しい世代のクルアーン教育が始まっていることがうかがえた。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

平成 26 年度には、チャム人の呪術書についての研究の途中報告を行い（「チャム人の失われた呪術書をめぐって ―カンボジアのマイノリティ・ムスリムの現在―」、明治学院大学国際学部付属研究所フォーラム）、呪術師のクルアーンとの関わりについて述べた。平成 27 年度と平成 28 年度には「チャム人の失われた呪術書をめぐって―カンボジアのマイノリティ・ムスリムの現在―」（前編と後編）を刊行した。さらに平成 28 年度には『チャムパ王国とイスラーム　カンボジアにおける離散民のアイデンティティ』（平凡社）を刊行した。

これらの成果の公表を通して、これまで特に日本人研究者によってはカンボジアのチャム人ムスリムの宗教的側面について研究がなされていなかったため、まったく新しい知見を提供することができたと考えられる。東南アジア研究者や、中東のイスラーム研究者からの関心の高さは、研究会や書評で反響があったことに示されていると推察している。

また海外の研究者も、呪術とクルアーンの関係や、クルアーン翻訳について論じてはおらず、チャム人共同体の宗教事情について新しい分析を提示できたと考える。これは次項の「今後の展望」に関連する事柄だと考えている。

(3) 今後の展望

まずは日本語で出版した著作の英語訳を刊行し、国内のみならず海外の研究の発展に貢献するものとしたいと考えている。

また今回の研究を通して、カンボジアのチャム人研究者との共同研究の基盤が築けたと考えている。よってこれをさらに発展させ、カンボジア以外の国のチャムに関する日本人研究者との交流も進めていきたい。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 大川 玲子、チャム人の失われた呪術書をめぐって＜前編＞－カンボジアのマイノリティ・ムス リムの現在－、国際学研究、査読無、48 巻、2015、77-90

② 大川 玲子、チャム人の失われた呪術書をめぐって＜後編＞－カンボジアのマイノリティ・ムス リムの現在－、国際学研究、査読無、49 巻、2016、71-84

〔学会発表〕（計１件）

① 大川 玲子、チャム人の失われた呪術書をめぐって－カンボジアのマイノリティ・ムスリムの現在－、2014 年 5 月 14 日、明治学院大学国際学部付属研究所フォーラム

〔図書〕（計１件）

① 大川 玲子、平凡社、チャムパ王国とイスラーム－カンボジアにおける離散民のアイデンティティ、2017、248

## ６．研究組織

(1)研究代表者

大川　玲子（OKAWA, Reiko）

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：50434189